

特別支援学級部会

<県研究主題>

一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案1

提案者 毛塚 京子(川崎地区)

<研究主題>

ユニバーサルデザインの視点を生かした体育の授業の取り組み

1 提案内容

(1) テーマ設定の理由

川崎市の特別支援学級在籍児童・生徒は急激に増加している。障害の多様化や発達障害の児童・生徒の入級が増えており、個別の指導計画に沿って個々の実態に応じて生きる力の向上を図るとともに、集団で互いに関わりあいながら生きていく力を伸ばしていくことも重要である。そこで、互いの良さを生かし、関わり合いながら集団で学習する授業づくりの在り方を研究テーマとした。多様な課題、目標設定、支援の手立てとして、ユニバーサルデザインの視点を取り入れ、学級のすべての生徒が学習活動に参加し「わかった・できた」ことを実感できることを追及していくこととした。

(2) 学習指導案（抜粋）

1 日時 平成27年1月8日(木) 5校時

2 場所 グラウンド

3 対象生徒 特別支援学級 知的障害/自閉症・情緒障害 合同

4 単元名(題材) 球技「ソフトボール」

5 単元名(題材)設定の理由

(1) 題材観 ソフトボールは興味・関心の高い種目の一つ。仲間とのコミュニケーションによって意欲を高められるような場面が多く設定できる。

(2) 指導観 一人ひとりの実態に差があることから、ルールの理解や技術の向上等がスモールステップで図られるように計画した。例えば、ティースタンドを使った簡易なルールを設定するなど、ユニバーサルデザインの視点を取り入れながら誰もがわかりやすく取り組みやすいように「①環境づくりの工夫」「②試合(ルール)の工夫」を取り入れて授業計画を立てた。

6 題材の目標

(1) ソフトボールに関心を持ち、積極的に活動に取り組むことができる。

(2) ボールを「打つ」「投げる」「捕る」等の技術を習得することができる。

(3) ルールを理解することができる。

(4) チームメイトと協力してゲームに参加することができる。

7 題材について(省略)

8 本時の活動(11/12時間)

9 生徒の題材に関する実態および本時の配慮事項、評価の観点(省略)

(3) ユニバーサルデザインの視点

ア 環境づくりの工夫

(ア) ホワイトボードの使用

ホワイトボードを使い、前回の振り返り、本時の活動の流れ、全体目標と個人目標、振り返りなど生徒が見通しを持てるような工夫や情報の視覚化を意識した。

(イ) ユニバーサルデザインの視点を意識した環境設定

マーカーコーンを使い、立つ位置や距離によってコーンの色を変え、どの色のコーンに行ったときに何をするのかを視覚的に理解しやすいように工夫した。

イ 誰もが試合に参加できるルールの工夫

運動量や技能の考慮によりルールの変更をした。ルールが明確なので全員に十分な運動量を確保でき、楽しむことができた。

2 協議内容

グループ協議「生徒同士が関わり合いながら学習する指導の工夫」

(1) 提案を受けての感想

ティーボールの取り組みが参考になった。指導の実態がかなり異なるが、皆が取り組めるように工夫されている。攻撃と守備がはっきり区別されているなど、ルールがわかりやすい。大人になったときにそのスポーツを見て楽しめるように正式なルールに近づけることも必要。

(2) 各校の実践から

- ・ 教科によっては個々の取り組みになるが、実技教科では集団による授業により、生徒同士の関わりを多く持てる。
- ・ 人間関係のトラブルは成長のきっかけである。
- ・ 国数では全体の時間・個別の時間をユニット化している。
- ・ 家庭科の調理でグループになるなど上級生が下級生を教える環境を大切にしている。
- ・ 授業の中で全体の時間を大切にす。
- ・ 全体で一つのものを作ることで話し合いができた。
- ・ どのようにことばをかけたらいかががわからない場合、視覚化する。個々の状況を把握し、出番を作り、作業で関わりを持たせる。
- ・ 交流の意義は、わかるから行くのではなく交流級の一員としてクラスの生徒への意識づけ、手助けがあることに気付くことである。

3 まとめ (助言)

支援のニーズは個々によって異なり、一人ひとりのボトムアップも必要である。小集団の中で基礎の動きを学び、将来的にはスポーツを楽しむ目的意識を持たせたい。集団学習の中にユニバーサルデザインを取り入れ、教員があまり入り込まず、自ら気付くことができる集団にしたい。生徒にゲームをする時間を確保し自らうまくいく方法の発見をさせたい。ゲームは実社会に近い。動きひとつひとつが生活に応用できる。一人でわからないことも仲間が教えてくれる。失敗してしまった仲間のケアができるなど、次のステップに進むための大きな意義を持つ。プラスの声掛けができる集団に育てることが大切である。

<研究主題>

特別支援教育の視点を 学校全体に生かす実践

1 提案内容

沼間中学校では多くの教員が、特別支援学級生徒の指導に関わる環境の中で、「障害の有無 にかかわらず、すべての子どもたちを対象とする。」支援教育の視点からの取り組みをおこなっている。特別支援学級と通常の学級に共通する課題について学校全体で共有を図り「わかる」授業づくりに向けて実践した。

(1) 支援計画

① 支援シート

特別支援学級の生徒のみならず、ニーズのある生徒を対象に作成している。

② 教科指導計画

教科指導計画の作成と、個々の生徒の評価

(2) 校内で実践されているユニバーサルデザイン

① 場の構造化

授業中に、ごみ捨てを理由にした注目行動が見られた。ごみ箱の置き場所を工夫することで注目行動が減少した。ひと目でわかるように技術・家庭科の用具置き場を工夫した。

② 刺激量の調整 (教室の黒板周りの掲示物の調整)

掲示物の整理、スクリーンカーテンの設置により、教室環境が整理され生徒の様子にも落ちつきが見られた。

(3) 授業実践

① 教科名

総合的な学習の時間

② 目標

- ・ 自分で調べて、考えて、主体的に判断し行動する。共同的に取り組む態度を育てる。
- ・ 新横浜駅までの行き方をペアと協力して掲示物を作る。
- ・ 修学旅行の前に、他の生徒にも役立つ作品を作る。

③ 展開

学習タイトル	学習内容	支援のポイント	評価
3年生のみんなにもわかる掲示物を作ろう。	自分たちが調べたこと、実際に言ったことを掲示物にまとめる。 他の3年生にもわかりやすい掲示物を作る。	まとめたプリントを生徒自ら参考にし、また使う写真を選択し印刷する。	ペアと協力して掲示物を工夫して作ることができる。

2 協議内容

協議の柱

「インクルーシブ教育を目指した特別支援学級と通常の学級のかかわりの工夫」

(1) ユニバーサルデザイン

- ・ ユニバーサルデザインについては、支援会議等で紹介している。
- ・ チョークの色、照度、机や椅子の脚につけるテニスボールなどは障害のある生徒のみならず、通常の学級の生徒にも良い効果がある。
- ・ わかりやすい授業のために、それぞれの教員が工夫していることを紹介し、取り入れていくことで誰にとっても過ごしやすい学校になってくる。

(2) 特別支援学級と通常の学級のかかわり

- ・ 生徒一人ひとりの状況を多くの教員が把握していることが大切
- ・ 特別支援学級の担任が通常の学級の授業を持つ、または通常の学級の担任や教科担当が特別支援学級の教科を受け持つことは相互理解のためにメリットが多い。
- ・ 小学校との連携も大切。特別支援学級の生徒が交流することが当たり前という感覚を持って進学してくると、良好な関係で交流がスタートする。
- ・ 運動会や文化祭などで良好な交流ができたことで、特別支援学級での生活にも意欲的になってきた生徒がいる。子ども同士のかかわりは大切である。
- ・ 特別支援学級は、不登校生徒や教室に入りにくい生徒の個別支援の場として活用している。
- ・ 特別支援学級を市内の適応指導教室に通室している生徒の学校復帰のステップとして活用していく計画がある。
- ・ 高校卒業後、社会で孤立してしまう生徒が少なくない。社会的な支援が必要となる。
- ・ 中学校卒業後の進路は多様化している。対応できる受け皿が必要である。

3 まとめ

沼間中学校をはじめ、逗子市では「全ての子どもたちを対象とする支援教育」に学校全体で積極的に関わっている。

支援シートは、個々の生徒の指導に対し目標や課題が明確であった。今後も有効に活用できると良い。校内で実践しているユニバーサルデザインは、場の構造化や刺激量の調整など、通常の学級でもすぐに実践できる内容であった。

修学旅行に向けての授業実践については、特別支援学級の生徒が行事に参加することは当たり前であり「主体的に参加するためにどうするか」、さらには「特別支援学級から学校全体に発信する」という視点がすばらしい。役に立っているという自信や、成功体験は自己肯定感を高めることにつながる。今後も、掲示物や学校の役に立つ仕事などを通し特別支援学級から学校全体に発信していきたい。

インクルーシブな教育という視点で、特別支援学級が通常の学級の個別支援の場となることや、不登校生徒の支援の場となる可能性もある。各校、様々な工夫をして取り組んでいくことを欲しい。